

事業の背景・目的

ラムサール条約登録湿地である青森県三沢市の「仏沼」は潟湖を干拓した耕作放棄地で、日本最大のオオセッカの繁殖地であり、また多くの湿性草原に生息する生物に好適な環境であった。しかし、近年乾燥化が著しく、植生に変化が生じていると同時に鳥類相にも影響が認められ、オオヨシゴイやシマクイナの生息が確認できない状況である。こうしたことから、湿性環境の回復を図り、以前の湿性草原棲生物相が復活することを旨とする。



乾燥化でヨシ原からヒメシオン群落に

事業の内容

事業① 湿性草原回復事業
・乾燥化が進む区域の排水路に簡易砂囊ダムを3基新設するとともに、昨年自費で造成したダムを改修して、排水抑制範囲を広げ、湛水域を最大で10ヘクタール程度に広げた。

事業② 植生調査
・乾燥区域で植生構造を調べた結果、乾燥化の指標となるスキの生育状況がよいと認められた。
・乾燥化の指標となるヒメシオンについても高密度の分布が確認された。

事業③ 鳥類調査
・2007年から継続している仏沼全域センサスではオオセッカの分布には乾燥化の影響はあまり受けていなかった。
・ICレコーダーおよびセンサーカメラによる調査では潜行性鳥類のシマクイナ、オオヨシゴイは確認されなかった。

事業③ 普及啓発
・6月～7月、三沢市内の小学校の自然観察会で生徒141人に仏沼を案内し、成り立ちや生息する生物について解説して啓発に努めた。
・三沢航空科学館での写真展で、当事業に関するパネルを展示した。

得られた成果

- 造成した簡易砂囊ダムは湛水効果が認められ、10ヘクタールほどの湛水域が広がった。
- 湛水域の拡大だけでは湿地としての機能が得られないので、湛水と濁水を繰り返すことを実現する施工方法を検討する必要があると考えられる。
- 湿性環境の再生と潜行性鳥類の回復は同時に進行する可能性は低いと思われることから、事業完了後も継続して調査することが必要である。



簡易砂囊ダムでの湛水状況